

古代より、古史伝承に由縁深く伝えられており、特に、海山の幸の豊穰さによつて、「御食つ国」として関心深い淡路島の、三原の地方の聖浄水の神威が移りこもる「小竹」を水神の座として移植することによつて、朝妻の御井の水に、より豊かな神威を加え得たことをよろこび祝福する心情を歌いあげている歌謡、結局、神威讃嘆の声として歌われた、神事民謡としての本質である。

人麿歌集と人麿作品

—その植物について—

若 浜 汐 子

(一)

人麿歌集と称するものについて、その作者及び編者の問題は、近世に入つて以来幾多の論争を展開しつづけて今日に至つた。最近では大久保正氏がその著「万葉の伝統」の中で『人麿呂歌集と人麿呂作歌』といふ一文を掲げて、従来の諸説に触れつつ独自の見解を發表されてゐる。

琴歌譜に、この「歌返」の歌謡が、大嘗会・新嘗祭の大歌として歌われたものとして記録されていること、即ち、宮廷儀礼歌として採用されていたことは、この「歌返」の歌謡が、本質として、神讃嘆の神事歌謡であり、即ち、鎮魂歌としての古代民謡であつた、その基本性格によつて享受理解されていたことを明示するものである。

(一九五八・六・六)

従来の問題は、人麿歌集は誰の編纂か、その中の作者は誰であるかといふ点に集る。その問題の究明には当然人麿作歌と明示されてある作品群との比較研究が採り上げられた。それに関するこれまでの方法は、年代考査や用字法の研究が重んぜられて来たが、近來更に加へて他の諸方面からの論考も盛になりつつある。

それにしても一たい人麿歌集の歌は誰が作つたのだらうか。又、誰があのだらうか。その作品の数は概略三

六〇餘首を収めてゐる。これは人曆の作であると標題に明記されてある作品の數約八十首と比べると四倍以上に當る量である。若しこの兩者の數を合せるならば万葉集中最多數の作をのこした大伴家持の作品數四七六首と肩を並べうることとなる。

はたしてこの二者をまとめて一人の人曆が作つたと見ていいものだらうか。仮にこれを肯定するならば、今日まで論ぜられて来た柿本人曆の評価はかなり大きい回転をするのではなからうか。更に又これを肯定するならば、あの特異な作家人曆の世界を、標題に明記された人曆の作品にのみ限つて見つめて来たといふ態度は、井蛙的な見解だつたとして新たに反省されなければなるまい。若し、この二つの作品群を合せて人曆一人の作、(或は大部^分が人曆作)とするならば、人曆の世界といふものはもつと広くなり、もつと深まるものにならぬがひない。

ところが、人曆歌集と人曆作品(以下人曆作と人曆明記あるものを指す)とでは確かに異質なもの幾つかを持つてゐる。この相反する異質な幾つかのものが、無理なく融合結束してそこに一つの人間像が映り出す地点にまで掘り下げられるといふ大事業が果された時、はじめて人曆歌集の歌は人曆の作である、といふ結論を得ることが出来るわけである。

しかし、果してそれは可能なことであらうか。

こんな疑問を折につけて抱いた私は、自分が植物に関する歌に眼をそそいでゐるうち、かうした面からの研究にも何かの示唆を受けることがあるかもしれないといふことに思ひいたつた。さうして兩者の比較を試みるつもりで人曆作品の植物と、人曆歌集の植物とを調査比較してみた。人曆作品の植物に就いては昭和三十年五月本誌第五号誌上に未熟な研究を發表したが、その後更に補訂を加へつつ、人曆歌集と比較検討してみたところ、いろいろと興味ある問題を発見し、解決することが出来た。

(二)

まづ最初に材料となるべき兩者の植物を表によつて対比してみる。ここで人曆作品と言つてゐるのは前記の如く、すべて標題に柿本人曆の作であることを明記したものだけを指す。三卷四二三・一七二〇・一七一一・一七六一・一七六二、並びに三六〇六——三六一〇の異伝はここには対象としない。調査資料には沢瀉久孝・森本治吉著「作者類別年代順万葉集」を用ゐた。

揭示には、植物の種類による、「木類」「草類」「竹類」の分類を捨て、五十音順に配列した。歌の中で、アサ・アヅサ・タヘ・ツグ・マユミなどの如く植物の名で出てゐるが、實際は製品化されてゐるもの、或は、クレナキなどの如く、色彩として扱はれてゐるもの、或は、アカネ・アヅサ・コモ・サネカヅラ・タケ・ツガノキ等

25 人麿歌集と人麿作品

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	植物名
コ	ク レ ナ ケ	ク リ	ク ズ	カ ハ ヤ ナ ギ	オ ホ キ グ サ	ウ ハ ギ	(イ ネ)	イ チ シ	テ ヅ サ	ア シ	ア サ	ア キ ガ シ ハ	ア カ ネ	
						221			(217 207)	(167 199)	(199 199)		(169 199)	人麿作品
2516	1297	(1783)	1272	1293	(3417)		1275	(2480)	1279	1288	1298	(2478)	(2353)	人麿歌集
							1285	(2505 3490)	(2468 3253)					

		26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	植物名
		ス ゲ (ス ガ)	ス ギ	シ リ ク サ	シ ラ カ シ	シ バ	シ ノ	シ ダ ク サ	サ ネ カ ヅ ラ	サ サ	サ ク ラ	サ キ ク サ	コ モ	
							45		(207)	133			(239 256)	人麿作品
(2857)	(2471)	(1250 1277)	(1773 1284)	(2468 1814)	2315	1274	1276	2475	(2478)	(2479)	(3129 3309)	(1895)		人麿歌集
(2863)	(2472 2473)	(2470)	(2417)											

								30	29		28	27	植物名	
ユ フ	タ ク ヒ レ	タ ク ナ ハ	シ ロ タ ヘ		シ キ タ ヘ	ア ラ タ ヘ	ユ フ (タ ク)	タ チ バ ナ	タ チ バ ナ		タ ケ	パ ス キ (ヲ ナ)		45
		(217)	(199 210 213 252)		(217 222)	(135 138 195)	(252)				(217)	(167 云 199)		人麿作品
(2496)	(1694)		1292	(2844)	(2515)	(2410)			2489	3309		(2242)	人麿歌集	
			2027	(2516)	(2411)									
			2028											
			2846											
			2854											

修辭的に扱はれてゐるものには、それぞれ符号をつけておいた。

(修辭的用法には()。植物の製品色彩の用例には番号の下に横線を引いた。従つて、両者を合せた番号も出てくるわけである。符号の全然ないのは実意の植物である。)

マクサ	47				
ヤマクサ					
ワカクサ	(217)				
コダチ	262				
		(1285)	(2456)		
		(2361)	(2862)		
コノハ	(210)				
シモト	45				
ハナ					(213)
ハナ	36				
ナ	38				
	196				
		1306			
		1683			
		1891			
		(1893)			
モミヂ	38				
	(207)				
	208				
	209				
	135				
	137				
	196				
	1094				
	1306				
	(1796)				
	2178				
	2179				
					題詞

右の表で明かなやうに、上・下段に共通してゐる植物の種類は、五十六種中たつた九種にすぎない。しかもその中のアサ・アシ・アヅサ・サネカヅラ・ヌバタマなどは修辭的技巧として慣用的に使はれてゐるものであつて、特別に植物といふ意識を示してゐるものではない。植物といふ意識の下に共通してゐるのはわずかながらシノ・ススキ・ツキ・モト、植物名からははづれるが、モミヂ・ハナ・クサなどの數種に過ぎない。つまり、人麿作品と歌集とは共通する植物の數も少く、その関心の度合や傾向も、著しい相違のあることに氣附く。以下二者の相異なる點數箇を簡単に記してみる。

(三)

1 人麿作品には植物を主題とした歌が無い。

人麿歌集にはそれがある。

まづ第一、眼につくことは人麿作品には植物が一首の主題をなし

てゐるものは全然ないといふことである。なるほど、人麿作品には植物を描いていかにも生動してゐる作品は多い。例へば一卷四五の輕皇子一行が冬の初瀬山を越えて阿騎野に野營をする長歌の中、荒寥たる山中の樹木の描写、雪降る阿騎野に枯草を押し靡けて野宿するあたりの描写等、かういふ自然物の描き方によつてこの歌が、どれほど生動し、その重さと厚さを増してゐることか。或は一巻二九の近江の荒都に立つて広茫たる春草を目の前にしたところ、或は次に掲げる石見国から妻に別れて来た山中で清らかにさやく笹の葉を描き出してゐるところ、人麿は実によく自然を觀、自然の中核を捉へてこれを短い言葉に表現することの巧みな作家だと思はせる。

ささの葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ来ぬれば

2133

ここでは、たつた一つの笹といふ植物を通し、いかに巧みに山中の清肅たる自然を表はしてゐることか。それは恐らくは深い自然觀照の結果によつて得られたものであらう。

しかしながら、以上の諸例歌に見る自然——植物は、人麿の作歌意欲の主題をなすものではない。初瀬山の巖冬の景や湖畔にしげる春草や、蕭々と山道に揺れるささの葉は人麿に作歌させた主体ではない。人麿に歌を作らせたものは歴史を荷負ふ人間の厳しい歩みの姿であり、妻への激しい思慕の情である。自然はさういふ人間の行動や姿を荘厳し美化し浄化する手段背景としてのみ捉へられる。自然はあくまで人間行為の背景としての役割に過ぎない。

この事は、恋歌や、挽歌に使はれた水中の草、藻についても言へる。好んで藻を歌ふ人麿ではあるが、それは実に女性姿態のこの上なき比喩として愛するからである。藻を歌つた歌の一つとして藻を主題となし、藻の美に一首全体の焦点を置いたものはない。

ところが、人麿歌集では植物そのものが作歌感興の重要点となつてゐるものが多いのである。

往く川の過ぎゆく人の手折らねばうらぶれ立てり三輪の檜原は

7 一一九

夕されば野辺の秋萩うら若み露に枯れつつ秋待ち難し

10 二〇九五

あしひきの山かも高き卷向の岸の子松にみ雪降り来る

10 三三三

ここに、うらぶれて立つてゐる三輪の檜原は、この場合作者の作歌欲を煽つた中心である。或は、夕べの露に沾れた散りがたの萩は

作者の心をゆさぶつて歌へと駆り立てた主題材である。峨々たる卷向山の崖に生ふる子松にふりかかる雪は、作者に自然の厳しさを歌はしめようとしてゐるのである。作者の眼はさういふ限らない自然の深奥へと奪かれてゆくのである。ここでは作者も含めて人間の姿は影をひそめてゐる。この種の歌はまだ七卷一〇九三・一〇九四・九卷一七〇七・十卷一八一四・二三一四・二三一五等、その他の例を挙げることが出来るが紙面の都合でここには省く。

要するに、人麿作品と人麿歌集との間には、自然への態度——植物を見る眼に大きな差異があるといふことは否定出来ない事実である。

(四)

2 人麿作品には生活的な歌、殊に農耕や生産に関する歌は皆無である。

人麿歌集の方にはさういふものを多々含んでゐる。

人麿作品には、植物を実生活と關聯させて歌つたものが無い。農耕や生産に関する歌などは勿論無縁といつていい。八十首に餘る相當な数を持つ作品の中に片鱗さへも窺へない。ただ、九卷一七一〇の左註に「或は云ふ柿本朝臣人麿の作」として

吾妹子が赤裳ひづちて植多し田を芻りて蔵めむ倉無の浜といふのがある。これは第四句迄の序の部分に農耕に関することが

盛られてゐるめづらしい歌である。しかし、今の場合、これらは人麿の作品と見ることを省いてゐるから、結極人麿作品とはつきり分るものの中には一首の例も無いといふことになる。皇室への深い帰依と、旅・相聞・挽歌、そこに心専らに詩の世界を展開してゆくかに見える。その作品を通してみる時、人麿といふ作家は、憶良などとちがつて、日常生活の基盤に立つて歌を作るといふ感激も意欲も持つてゐなかつたのでは無いかと思はせる。

ところが、人麿歌集を開くと事情は異なる。そこに見る反人麿作品的なものの一つとして、生活と植物の密着した歌の相当あることを知る。

君がため浮沼の池の菱採むと我が染めし袖ぬれにたるかも

7 二四九

打つ田には稗は数多にありといへど扱えし我ぞ夜ひとり宿る

11 二四七六

剣の後鞆に納野に葛引く吾妹真袖もち著せてむとかも夏草刈る

7 二七二

住吉の出見の浜の柴な刈りそね未通女等が赤裳の裾のぬれてゆ

7 二七四

かむ見む
住吉の小田を刈らす子奴かも無き奴あれど妹が御為と私田刈る

7 二七五

このやうな生活に即した植物の歌は旋頭歌の中に特に多い。葛引

きの労働にいそむ女への呼びかけ、稲田を荒す稗、出見の浜の柴刈り、かうした日常生活的なものは人麿作品中には現れない。かうした相違は何にもとづくのであらうか。ここにも人麿作品と人麿歌集との根本的性格の問題がありさうに思はれる。

(五)

3 人麿作品の植物に関する修辭は枕詞が序詞や比喩の約三倍半に當る。

人麿歌集の方は反対に枕詞や序詞や比喩の六割半程度にしか當らない。

人麿作品の植物は上掲の表の如く修辭的用法が極めて多い。しかもその大部分が枕詞によつて占められてゐる。植物に関する名称二十八種のうち修辭に使つたもの二十種、そのうち、枕詞十七種それを二十八様に使つてゐる。これに比べて、序詞や比喩は、内容的にはすぐれてゐるが数の上からいへば甚しく劣勢である。

人麿歌集の方はこれと反対である。

修辭用例五〇種のうち、十七種が枕詞、それを十九様に使つてゐる。人麿作品約八十首との比率からいへばはるかに少い。

これに対し人麿作品で極めて少い序詞と比喩がこの方では相当の数を示し、従つて内容的にも豊富である。

(六)

次に個々の植物についての相違を考へる。

A モミヂについて

人麿は藻と共に黄葉を好んで使ふ。作品中八回の用例がある。これは藻に次いで多量である。そのうち黄葉を挿頭すといふのが二回ある。その一つは、山の神が天皇への御調として挿頭す(一三)。他の一つは、皇女が頭挿す(六、一九)、となつてゐて、いづれも皇室讚美に關係する。次に、枕詞に使つた例が二回ある。死を意味する「過ぐ」に懸けてゐる(二一、二七、二七)。

次は妻を思慕する時の背景に使ふ。黄葉が散り乱れるので妻の振る袖が見えないと嘆く(三五)。又、妻のあたりを見たいと思ふから黄葉よ散り乱れるな(三七)。かういふ使ひ方である。

次には妻の死に關連する場合である。例へば、黄葉が深く繁つてゐるために妻が迷ひ入つた(二八)。或は、黄葉が散るにつれて妻を思ひ起す(二九)といふ扱ひ方である。

これを通観すると、人麿の眼に映る黄葉といふものは、すべてが人間に結びついてゐる。さうして、その人間とは、人麿の絶対崇仰の的である皇室の人々であり、さもなくば愛する己が妻かである。

かざしにする黄葉、妻の姿を包み隠すばかりの満山の黄葉、へんぼんと翻り散つてゆく黄葉、それらは、いづれも人間の愛情や悲哀

を美化する背景として映し出されてゐる。秋の山を彩る黄葉は人麿の眼にはただ自然の美としてのみ受けとられなかつた。必ず人間の行為を美しく装ふ飾りとなつて現れてゐる。人の死を悼む場合でも妻をいつくしむ場合でも。これは人麿の自然の把握し方の根本に連つてゐるのである。

これに対して、人麿歌集の方にはモミヅの例が六個見える。人麿作品との比例を見るとこちらは非常に貧弱である。その内容は簡單なる叙景の場合が五例、枕詞が一例となつてゐる。

この兩者を比べて大きな差のあることに氣附く。人麿明記作品では單なるモミヂの叙景ではなく、自分の尊信し敬愛する人のことを飾り表現する為に使はれる。いはば抒情的感動としてこれを捉へる。歌集の方は自然體照の対象として客觀的に見てゐる。そこには人間の行為や姿は關係しない。作者の見てゐる自然は作者の屬してゐる人間の世界とははっきり區別されてゐる。人麿の見てゐるモミヂは人間とは別個の自然としてのモミヂではなく、人間世界と一つになつた、人間に覆はれたモミヂである。

次にその例歌を一例づつ示す。

人麿自作 秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも

二〇八

人麿歌集 妻ごもる矢野の神山露霜ににほひそめたり散らまく

惜しも(黄葉を詠める)

10 二七八

B モについて

(七)

人麿が水中の草を女性の姿態を表す比喩として好んで用ゐたことはすでに述べたが、その使ひ方の多くは、初め、眼の前に自分の見る(或は嘗て見た)実際の藻を巧みに描写し、次にこれを女の姿態の比喩として述べてゆく。例へば明日香皇女を悼む挽歌では

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡しし 下つ瀬に 打
橋渡す 石橋に 生ひ靡ける 玉藻ぞ 絶ゆれば 生ふる 打
橋に 生ひををれる 川藻ぞ 枯れるば生ゆる 何しかも わ
が王の 立たせば 玉藻のもころ 臥せば 川藻の如く 靡か
ひし 宣しき君が 朝宮を 忘れ給ふや…… 2一九六

といふやうに、一首七十五句のうち二十句を費して縷々と藻について述べてゐる。これは皇女を悼む挽歌である。しかるに、この部分だけを見るならば、自分の妻か愛人に対するが如き述べ方である。だが、人麿としては、皇女の女としてのなやかさを讃へまつるには、水中に揺曳する藻をとり来つて、かういはなくてはゐられないのであつた。更に、相聞の中で、石見国から妻に別れて来る時の歌でも石見の角の海岸の有様を述べてから、その和多豆の荒磯の上に寄せくる藻をば

……か青なる 玉藻興つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽振

る 浪こそ来寄せ 浪の共 彼より此よる 玉藻なす 寄り寝
し妹を…… 2一三二

と実に躍動的な描写を以て比喩に導いてゆく。読者はその魔術にいつの間にか魅せられてそこに美しい幻を描くことが出来るのである。人麿がかういふ手法を如何に愛用したか、長歌一首の中に二回三回四回と繰り返して用ゐ、タマモ・カハモ・オキツモ・フカミル、などと様々に使ひ分けてゐるのを見てわかる。かういふ例は十三巻の他の歌にもある。しかし、人麿の熱情こめたこの比喩のすぐれた技巧的特徴は他の作家の追隨を許さぬものである。

さて、人麿歌集はと見ると、第一、数に於て全く寥々たるもの、僅かに六首の例しかない。しかも、人麿作品のやうな女の比喩に使はれたものはたつた二例、しかも短歌といふ形の制約によるとばかりは思へぬ程の単に「靡く」といふ語を引き出す為の起用にすぎないと見られるやうな使ひ方である。

水底に生ふる玉藻のうち靡き心は依りて恋ふるこの頃

11二四八二

敷たへの衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ吾を待ちかてに

11二四八三

他の四例は、藻の花が咲いたら妹と見ようといふもの、ナノリソの花を「名告る」に引きかけたもの、沖の藻を隠す五百重浪を恋の繁さに譬へたもので、いずれも人麿作品には見えない例である。要す

るに、藻に対して両者の間にはかなり大きい開きがあるといふことを知りうるのである。

(八)

以上の外に著しい相違の眼につくものに、スゲ(菅)とマツ(松)及び花の問題がある。紙数が超過したので以下二三について簡単に述べる。

C スゲについて

万葉集にはスゲ(又はスガ)の歌が四十六首程ある。枕詞や序詞が多いが、何故この草がこんなにも万葉人の歌に採り上げられたのであらうか。中にはこの草を持つて天の河で身潔身をきよめしたといふ歌もある。人麿歌集の中にも、

浅葉野に立つる神占かみうらの菅の根のねもころ誰ゆゑ吾が恋ひざらむ

12 二八六三

といふのがある。これらによると、この草に対して古代人は何か信仰を持つてゐたやうである。原始の間には自然畏怖の情から様々な自然現象や事物に対する信仰があつた。植物信仰もその一つである。さういふ意味で万葉時代の人々にもスゲといふ草は神力を具へた草と見られたらしい。このスゲが人麿歌集の方には九例もあるが人麿作品の方には一つの例も見ない。多くの古代人に関心を持たれたこの草が人麿には全然採り上げられてゐないことは注目すべき

ことである。

D マツについて

マツは万葉集中には七十余首を数へる。古代人が神聖視したスギ(杉)が集中十一例にとどまるに對し約六倍半に當る。人麿歌集にはマツの歌が十一首あるに對し、人麿作品の方にはこれ又一つもない。万葉の人々にこれ程歌はれた木であるから、人麿が全然見たことも無かつたとはいへない。人麿は何か嚴肅な自然背景を描写する時にはよくマキをいふ。当時、マキと稱したのは多分、ヒノキとかスギなどを指したものと考へられてゐるが、森嚴な自然を描出する場合、松の樹は人麿の眼からは外そとれてゐたやうである。

E ハナについて

人麿作品では、ハナといふ語は、「花散らふ秋津の野辺(六三)」・「春されば花かさしもち(八三)」・「春されば花折りかさし(九六)」の三回と、別に枕詞にハルハナといふのが出る。この外には枕詞にユバナといふのがあるが、これは植物の花でないから今は省く。いつも問題になる四卷四九六の「み熊野の浦の浜水綿百重なす」のハマユフについて、花を指したのだといふ説もあるが、歌の上ではこの説を支持する客觀的証拠は全然ない。この外に、花に關して歌はれたものは皆無である。(「ハマユフ」に就いては拙稿「上代文学」五号の「楠本人参考ありがたい」) (「ハマユフ」及び「白路」三十二年十月号「はまゆふ行」を御

とところが人麿歌集の方を見ると、イチシ・サキクサ・サクラ・ツ

ツジ・ハギ・ヤマチサ・ユリ・モノハナなど非常に豊富たとは言へないまでも、花そのものに眼をとめた歌が相当に散在してゐる。その多くは比喻や序詞に使つたものであるが、中には奈良朝歌壇に盛に現れるハギなどがこの歌集の中で美的鑑賞の対象として歌はれてゐる。人麿作品の中で疎外されてゐる「花」が歌集中に数々見えるといふことにも自然への関心着目の差がうかがへるわけである。

(九)

以上は、人麿作品と、人麿歌集との植物関係の相違点を主眼として比較を試みて来たのであるが、この両者にはもとより類似の点も亦ある。この差異の相と類似の相とがどういふ関連を持つかといふ

六朝風——旅人と憶良

中 西 進

一

旅人と憶良という二人の作家の關係は夙にすぐれた考察を得て來ているが、今、改めてこの二人の關係が根本的な思想によつて

ことはこの次の課題である。従来、周知のやうにこの二つの作品群の關係に就いては常に用字法のことから第一にとり上げられた。勿論このことは解明の大切な手がかりである。しかし問題の底に潜む様々の謎を解く為には更に多角的に照明を当てることを忘れてはならない。現代はその段階に在つて、諸家により新しい研究部門の扉が開かれつつある。

この小論はただ二者の植物についての相違点を例示したに過ぎないが、如上の意味に於て、かういふ角度からの研究も亦何らか一つの捨石としての役を荷負ふことは出来ないであらうか。

(後記) 前掲の表の中、シロタへの人麿歌集の例歌番号のうちに二〇二三を加へる。

のではないかという事を、考えてみたい。

二

第一に、多少煩瑣に亘るが試みに養老元年から天平二年にかけて